

『復刻版 書之美』 全46号

体裁：B5判・合本・上下巻（各約880頁）

附別冊（約30頁）

全3冊セット函入

定価：本体82,000円＋税

2012年10月刊行予定

ISBN978-4-336-05539-2

上田桑鳩（うへだ・そうきゅう）

一八九九年兵庫県吉川村生まれ。近代書道の巨匠・比田井天来に師事する。一九四〇年に奎星会を結成、一九四八年に『書之美』を創刊。古典臨書研究の傍ら、造形表現としての書を主張、現代書の理論化に努め、指導者として活躍した。啓蒙書の刊行も数多い。一九五五年には日展を脱退。サンパウロ・ビエンナーレなど海外展にも多く出品している。代表作に「寒江」、「愛」、「鳳」など。門下からは前衛書・現代書の俊才が輩出している。一九六八年没。

森田子龍（もりた・しりゅう）

一九二二年兵庫県豊岡市生まれ。神戸で上田桑鳩に出会う。桑鳩の右腕として、戦前から作品を発表。戦後上田桑鳩門下の機関誌・競書誌として『書之美』を創刊。後に井上有一とともに桑鳩門からは脱退し、総合書道雑誌『墨美』を創刊、墨人会を結成。現代書・前衛書の組織化、理論化、啓蒙に大きく貢献した。作家としても「いのちの躍動としての書」を提唱し、代表作に「灼熱」、「沖」など。二〇〇〇年紺綬褒章受章。一七一一、E17

◆本書の特色

I 本書は昭和二十三年に創刊された上田桑鳩主宰・森田子龍編集の競書雑誌『書之美』全四十六号を完全復刻するものである。刊行期間が短く、各種公共機関にもほとんど所蔵がない雑誌の復刻として極めて貴重。

2 『書之美』は、当初は上田桑鳩門の機関誌・競書誌として出発、ついで「奎星会」の機関誌として位置づけられていくが、その誌上では桑鳩・子龍・宇野雪村らによって書の根底に肉迫する書論が展開された。古典と格闘しながら書の現代性を探り、文字を媒介しない「書」の実験の場「a部」の創設へと至る。誌面からは、当時の書人たちの熱い息吹を感じることが出来る。

3 編集主幹の森田子龍はモンドリアンやピカソ、さらにはイサム・ノグチや長谷川三郎らの造形作家の作品、また美学者・井島勉、久松真一、有田光甫、木村重信らの論考を誌面で積極的に紹介。図版では桑鳩の作品・臨書、子龍・井上有一・江口草玄らの初期の作品も見ることが出来る。本誌廃刊とほぼ同時に創刊され、海外にも知られた書道雑誌『墨美』の新しい方向性がすでに本誌で確認できよう。

4 別冊では監修者による解説、また当時を知る評論家や書家へのインタビューなども収録。戦後現代書・前衛書、さらには戦後前衛美術を改めて検証する上で、またとない資料である。

◆本書をお薦めしたい方々

- 近現代美術史・戦後前衛美術・美学・書道史研究者、書家の方々に
- 美術系大学、大学書道専攻学科、教育大学
- 美術館、博物館、公共図書館

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL:03-5970-7421 FAX:03-5970-7427
<http://www.kokusho.co.jp/>

◎取扱書店

今明らかになる現代書の貴重なドキュメント

書道雑誌『墨美』のまぼろしの前身誌、ついに復刻！
戦後書道史・美術史の再評価を迫る画期的資料！

復刻版

書之美

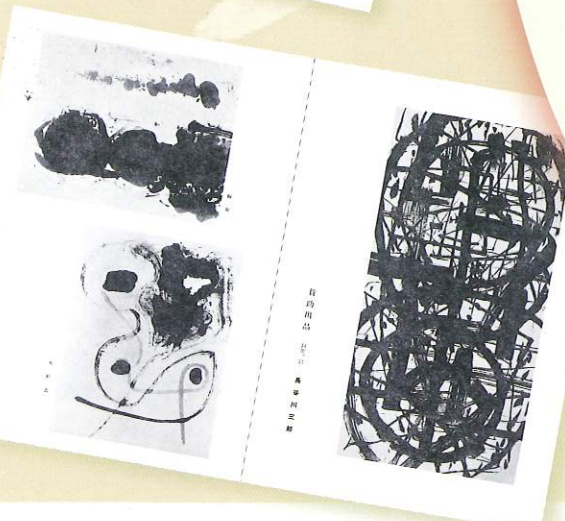
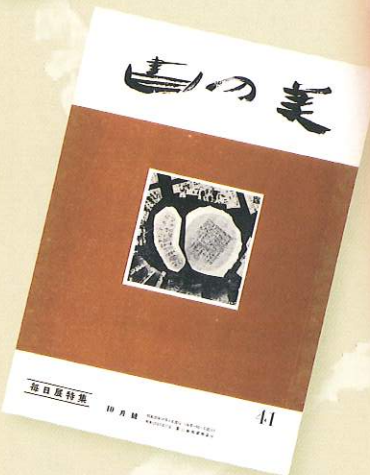
〈全2巻〉
全46号

上田桑鳩主宰・森田子龍編集

◆監修：天野一夫（豊田市美術館チーフキュレーター）

書き下ろし論文＋
総目次を収録した
別冊付き

全四十六号を忠実に復刻
上下巻・総約一八〇〇頁



国書刊行会

▼書道雑誌の範疇を超えた画期的な時空間

天野 一夫（美術評論家・豊田市美術館チーフキュレーター）

初めは研精会という上田桑鳩門下の会報にして競書の雑誌に過ぎなかったのかも知れない（その後、奎星会は一九五一年に再発足し、その機関誌の性格となる）。敗戦間も無い一九四八年という価値転換期に立ちあげられたこの雑誌は、桑鳩を中心としながらも、森田子龍が編集・発行を担当する中で、大きくその範疇を超えてゆく。桑鳩・宇野雪村らは、臨書を指導し、また古典を論じながらも、現代的な書の新たな展開を考究したのである。既に子龍「虹の様に」（第二号）に明らかなように、モンドリアンなどの西洋抽象絵画を参照しながら、国際的な視点からあらためて書を造型として捉えようとしている。

当時の上田桑鳩、宇野雪村、森田子龍を中心に、さらには新進作家として成長していく井上有一、江口草玄らの書論や、貴重な実作が掲載されている。さらに誌上では戦前から日本の古典美にモダン・アートを見ていた前衛画家・長谷川三郎をはじめ、須田国太郎、辻哲堂、須田剋太などの画家や美術家、そしてその後の書論の支柱にもなった美学者・井島勉をはじめ、上野昭夫、さらに河北倫明、木村重信などの当時の気鋭の研究者も座談会や論者として登場し、活発な横断的な視点を展開し、このように書を書壇だけのものとはせずに、様々なジャンルの人々の論じる場として開放していった。さらに先の長谷川や彼を通してのイサム・ノグチや欧米作家との交流を契機に、誌上にa部という文字性を逸脱した実験的な場を設けたように、書が当時の先鋭な西洋造型一般の中で再び洗いなおされ、自らを再び意味づけて行く戦後前衛書の先捷としての貴重な媒体となっていくのである。その姿勢は後の同じく子龍の編集・発行になる「墨人」「墨美」をはじめ、「奎星」など後の雑誌に引き継がれていくばかりでなく、書の意味性を括弧に括り、線の造型として確立していくとする思想は、その後の戦後書の一歩を規定していったのである。

森田、井上らの脱退、墨人結成によって「書的美」は四年で突然休刊となった。この四十六冊の雑誌はそのような戦後書道史の重要な基点のドキュメントであるばかりか、これまで欠落していた旧書壇との交流も含めた美術史の再構築、そして戦後国際交流史の貴重な証言のために、さらにはこれからの新たな書を志す気鋭の作家のためにも、この当時の画期的な時空間を再び送り届ける必要があるのである。

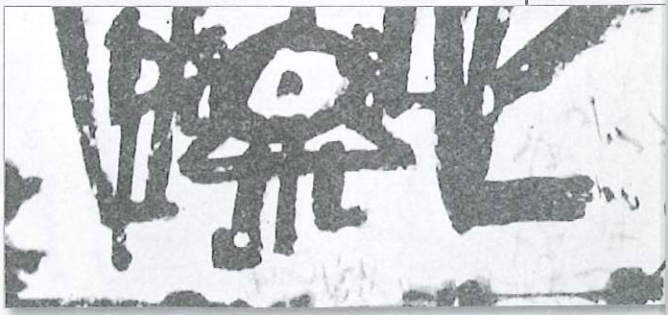


▼現代日本の志の低さをゆさぶる

芳賀徹（東京大学名誉教授・静岡県立美術館館長）

敗戦直後の日本で、「藝術としての書」を求めるこんな熱っぽい雑誌が出ていたとは、当時二十歳前後の一学生が知るはずもなかった。だがいま『書的美』の四年間の各号を繰ってゆくと、あのころの知的混乱のさなかでの解放感と興奮とがひしひしとよみがえってきて、実に面白い。

上田桑鳩も森田子龍も書道界の旧弊打破のために大まじめで戦っていた。そこに美学者井島勉が加わって書の本論を説き、戦前からの抽象画家長谷川三郎はイサム・ノグチやアルトゥング、アルプ、スラーヂュラを紹介して書の現代的普遍性を語った。井島の司会で桑鳩に須田剋太や辻哲堂までが列なつた座談会も、発言は混乱しつぱなしたが、その熱気が痛快だ。井上有一がしだいに実力をつけてゆくさまも窺える。最後にその井上や森田ら『墨美』組の五人が総帥桑鳩に訣別の辞を書き、桑鳩は飼犬に手を噛まれるつらさを綿々と述べる。その文章を全部掲載して『書的美』は終刊する、というのも一種のフェアプレイだろう。全員暗中模索のなかでのこのまじめさと活気と闘争心とは、二一世紀日本のいまの書道界のみならず美術界全体に瀰漫する「きれいごと」、志の低さをゆさぶるのに、十分な迫力をもつてはなからうか。



▼美の「苦難」と昇華の史料

田村空谷（書家）

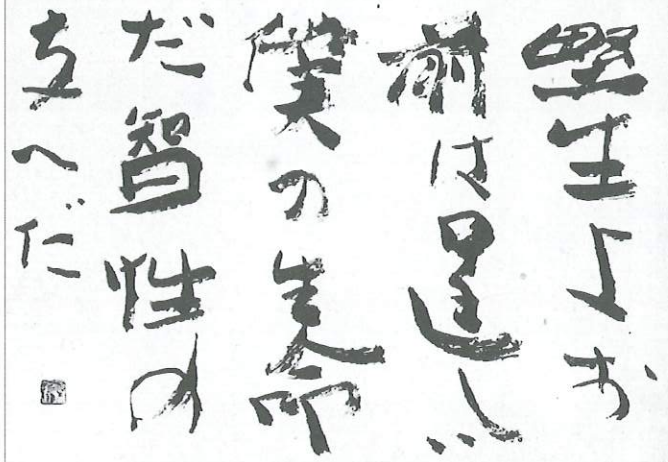
『書的美』は、奎星会初の月刊誌である。その発刊は、今から六十四年前。敗戦直後の混乱と不安と貧困の中から現代書の新たな舞台が誕生したのである。

『書的美』は、戦後日本の前衛書運動の原点となった。誌面そのものが新たな理論と実践の織りなす、書と絵画の貴重な一大ドラマである。それは書にとつて苦難の歴史でもあったが、現代書の果実として昇華した。現代書道史・現代美術史の貴重な史料としての価値は高い。

このたび、その復刻版が刊行されることになり、前衛書に関心がある書家・研究者には手元において必見・必読。本書を強く勧める。

●主要収録作家

上田桑鳩／森田子龍／宇野雪村／萩原冬珉／井上有一／江口草玄／関谷大年／中村木子／出口草翁／守時大融／川口芝香／喜代吉郊人／須田剋太／長谷川三郎……ほか



●戦後美術・前衛書の胎動を 克明に記した唯一無二の資料！

上巻：創刊号（昭和二十三年四月）～第二十六号（昭和二十五年五月）
下巻：第二十七号（昭和二十五年七月）～終刊号（昭和二十七年三月）
別冊内容：口絵／書き下ろし論考・天野一夫／総目次

〈『書的美』より〉

感動あれば誰もが、それを何かに表現したいものだ。その表現されたものが真の芸術である。それこそ、人生につながる芸術であり、人生に益する芸術である。

……（上田桑鳩「発刊の辞」 昭和二十三年四月 創刊号）

……マチスのその行き方と書の場合とを考へ合わせると、西洋と東洋とを両脚にして立つた虹の様に、何か高い所でこの二つが一緒になる時が何時かある様な気がしてならないのです。……（森田子龍「虹の様に」 昭和二十三年五月 第二号）

……全作品を貫く造形性、それは直かに私の心の戸をたたいてくれる。会場でお目にかかった長谷川三郎氏が一つの作品を指して「あれなど殆ど字です」といわれたように、私どもの書の中に内包する造形の秘密と根を一つにしたものである。ノグチ氏の滞日中、書への関心深く、或時、西田幾多郎氏の書を見て感激されたのも偶然ではない。……（森田子龍「イサム・ノグチ作品展を観る」 昭和二十五年十月 第三十号）

……ここに連署を以てこの手紙を差上げることになりました。……我々五人、今、ここに偶々互いに志を同じくしていることを知り、その故に、新しいつながりを痛感し、一つのグループ——墨人会と名付けました——を結成することになったのであります……奎星会からも退かせて頂きたく存じます……（井上有一・江口久男・関谷善亮・中村佐魂・森田清「お願い 上田桑鳩先生」 昭和二十七年三月 終刊号より）



イサム・ノグチ作品

